

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520532

研究課題名（和文）日本語教育におけるビューイング教育の導入——メディア・リテラシーを踏まえて

研究課題名（英文）Introduction of Media Literacy-based 'Viewing' Education to Japanese Language Teaching

研究代表者

門倉 正美（KADOKURA MASAMI）

横浜国立大学・留学生センター・教授

研究者番号：80127753

研究成果の概要（和文）：国際語用論大会(2009)および社会言語科学会大会(2010)での発表、「リテラシーとメディア・リテラシー」シンポジウム(2010)の開催等によって、言語教育における「見て理解する viewing(ビューイング)」要素の重要性を強調することができた。特に、視覚表現（例えば絵や写真など）と文字表現が複合した意味表現の理解のあり方、つまり「視解+読解」という意味での「視読解」の探究の端緒を切り開くことができた。

研究成果の概要（英文）：Our presentations in Conferences and our symposium 'Literacy and Media Literacy' succeeded in stressing the importance of 'Viewing' in the language education. Most significantly, we were able to offer new directions for the study of the 'Visual-Reading Comprehension', the fertile field in language education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語教育

キーワード：教授法、カリキュラム、ビューイング、メディア・リテラシー

## 1. 研究開始当初の背景

オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、イギリスなどの英語圏の英語教育の中では、メディア・リテラシーの影響を受けて、従来の4技能（聞く・話す・読む・書く）に「見る viewing（ビューイング）」を加えている地域がある。ビューイングがこのような言語教育に組み入れられた背景には、これらの地域におけるメディア・リテラシー運動を英語教員が積極的に担ってきた経緯があると思われる。実際に、筆者の西オーストラリアにおける調査においては、メディア・リテラ

シー運動の担い手の英語カリキュラム作成者たちが英語教育へのビューイング教育の導入に中心的な役割を果たしている。

メディア・リテラシーは、日常生活に浸透しているメディア表現を読み解き、自ら創り出すことが必須の教養となっている現代社会の要請に応える教育運動である。メディア・リテラシーを推進した英語教師たちは、メディア表現と言語表現との関係を捉え直し、TV や映画、写真、マンガ、イラストなどの視覚表現が伝える意味や価値観を従来の言語教育が捉えていないことを反省し、ビ

ューイングという教育領域を言語教育内に構築したのである。

ビューイングは、また、先進的な英語教育者による、今後の英語教育の方向性宣言とも言える“*Multiliteracies*” (Cope, B. & Kalantzis, M.(eds.)2000) が主張する、意味の Multi-modality (多様な形態における意味の複合) における「視覚的意味」理解の教育に対応しており、言語教育の可能性を飛躍的に広げる面をもっている。

本研究の共同研究者である門倉と岡本はここ 10 年ほど、日本語教育にメディア・リテラシーを導入することの意義を理論的・実践的に主張してきた。国語教育ではメディア・リテラシーを導入する動きが一部ではあるのに対して、日本語教育ではメディア・リテラシーはほとんど取り込まれてきていない。そうした中で、門倉、岡本は、国語教育においてメディア・リテラシーを取り入れ、西オーストラリア州におけるビューイング教育を紹介している奥泉の研究に共鳴し、3人で英語圏におけるビューイング教育カリキュラムの共同研究を行うようになった。この共同研究を踏まえて、自分たちのメディア・リテラシー教育実践の成果を反芻した上で、ビューイングを日本語教育の教育体系の中に組み入れるための理論的・実践的研究をめざした。

## 2. 研究の目的

メディア・リテラシーが言語教育にもたらした積極的な側面には、メディア表現の critical な理解と制作という本来の作業だけでなく、学習者中心、プロジェクトワーク重視、視覚表現の意味の体系的探究、市民意識の向上等の課題がある。日本語教育においてこれらの課題を踏まえたメディア・リテラシー教育を導入してきた実績を土台として、西オーストラリア州などのビューイングのカリキュラム体系を分析し、日本語教育におけるその実践モデルを試行する。

現代社会における視覚表現の影響力と言語教育との関係についての学際的なシンポジウムを行い、視覚表現と言語との複合による意味表現の理解をすすめる。

ビューイングを日本語教育に組み入れることの理論的・実践的意味を広く国内外の言語関係の学会における研究発表でアピールし、適切なフィードバックを得る。平行して、ビューイングの教育実践を行い、その実践プロセスを分析評価してビューイング教育のモジュール教材や授業モデルを開発する。

## 3. 研究の方法

(1)2 人の共同研究者 (門倉・岡本) のメディア・リテラシー教育実践の分析とビューイング要素の抽出を行う。

(2)2009 年 7 月にメルボルン大学で行われる国際語用論学会で、ビューイング要素の意味分析を行う研究発表を行う (学会発表⑦)。

(3)オーストラリアのブリズベンにおける先進的な初等・中等教育における英語教育を視察する。

(4)「メディア・リテラシーとリテラシー」をテーマとする学際的なシンポジウムを開催し、翌日に主な発表者間での密度の高い意見交換を行う (学会発表④)。

(5)2010 年 3 月の社会言語学会大会で、視覚表現と言語との複合による意味表現への着目の必要性を問題提起する (学会発表⑤、⑥)。

(6)2011 年 7 月の Visual Literacies の国際学会で、岡本・奥泉が、日本語表現におけるマルチモーダルな要素の特徴を分析する (学会発表②)。

## 4. 研究成果

(1) 視覚表現の理解 (ビューイング=視解) プラス文字の理解 (読解) が複合した「視読解」という教育研究領域の重要性を提起した (雑誌論文①)。門倉はすでに門倉 2007 で、図解をモデルとした「視読解」の枠組みの提起と教育実践を報告していた。今回の研究においては、視読解を Multiliteracies と Multiple Intelligences という二つの「マルチ理論」の方向性のもとに位置づけた点、および、「ビューイング=視解」と「読解」の複合のあり方が、マンガや絵本のように「相互的」であるもの、文字のフォントや見出し、レイアウトのように、文字の「読解」そのものに「視解」が組み込まれている「同期的」なあり方、そして、テレビ番組などの「視解」的読み取りの枠組みが文字テキスト読解の際に無意識的に働く「枠組み性」の 3 つのあり方を提起した点に、「視読解」論としての進展がある。

(2) メディア・リテラシーとリテラシーの関係に関する学際的シンポジウムにおける基調講演および研究発表のテーマを紹介する。

1) 基調講演: 水越伸 (東京大学・メディア論) 「基本トポロジーと隠喩の体系—メディア・リテラシーをめぐる二つの仮説」

2) 藤本朝巳 (フェリス学院大学・伝承文学/絵本論) 「絵本における「視覚言語」」

3) 山住勝広 (関西大学・教育方法学/活動理論) 「「本を読む教育」から「本を作る教育」へ」

4) 立田慶裕 (国立教育研究所・生涯学習論) 「読書への「自立的関わり」がリテラシーレベルを向上する」

5) 門倉正美 (横浜国立大学・日本語教育) 「視読解—<見る>と<読む>の同期性と相互

性」(学会発表④)

6)比留間太白(関西大学・教育心理学)「思考の言語への接近法」

7)筒井洋一(京都精華大学・国際関係論/日本語表現法)「ソーシャルメディアにおけることばとメディアの変容」

8)本橋春紀(日本民間放送連盟・メディア・リテラシー/メディア倫理)「送り手と受け手が共に学ぶメディア・リテラシーの実践」

9)横田和子(聖心女子大学・国際理解教育)「国際理解教育の視点からみたことばの学び—<聴く>ことを軸として」

10)中村純子(東京学芸大学大学院博士課程/中学国語教諭・メディア・リテラシー)「国語教育におけるメディア・リテラシーのコア・コンセプトと実践の提案」

11)服部久美子(和洋女子大学・英文学/英語教育)「シェイクスピア映画と英語教育」

翌日は、藤本氏、山住氏、横田氏と本共同研究者が、それぞれのテーマに関して密度の高い議論を交わすことができ、特に、藤本氏の絵本論との協働の土台が形成されたことの意義が大きかった。

また、本シンポジウム準備過程で、共同研究者3名が、関西大学の山住氏の研究プロジェクトにおいて、ビューイングとメディア・リテラシーと言語教育との関わりについて研究発表を行い、山住氏、比留間氏から生産的なコメントをいただくことができた。

(3) 2009年の国際語用論学会での発表では、アメリカにおける日本語教育でポドキャスティングやカタカナプロジェクトなど独特にメディア・リテラシー実践を行っている佐藤慎二氏および熊谷氏、深沢氏と「言語教育におけるメディア・リテラシー」というテーマによって共同のセッションを行った。アメリカでのメディア・リテラシー教育実践者との意見・情報交換はたいへん有意義だった。

(4)2011年7月の英国でのビジュアルリテラシー学会での岡本・奥泉の共同発表は、日本語表現におけるビューイング要素への着目をアピールし、好評を得た(学会発表⑦)。

(5) 社会言語科学学会大会において「視読解」の各局面について研究発表を統合するテーマ講演を行った(学会発表⑤)。本講演は、シンポジウム「メディア・ディスコースにおけるマルチモーダル・コミュニケーション」のテーマ講演である。このシンポジウムでは、テレビ番組におけるテロップや、ウェブでのチャットにおける非言語情報、新聞のスポーツ報道における「表記、写真を通じた多層性を読み解く」(学会発表⑥)3つの研究発表がいずれも「視読解」のmodalityにある意味表現を論じている、と言える。

(6)2011年11月に韓国の語学教員研修において行った講演(学会発表①)では、例えば、レイアウトやメニューにおける写真の読み取りの表現化や、さらには絵本を「開き読み」して、感想やコメントを「書く」等、ビューイング教育の問題意識を背景としたライティングのあり方について示唆する講演を行った(学会発表①)。

(7)本科研の土台となる門倉・岡本・奥泉のメディア・リテラシーをめぐる共同研究は日本語教育と国語教育との連携の要素も強い。シンポジウムは、それに加えて英語教育との連携の基礎づくりの役割も果たした。

すなわち、門倉が2011年度からフェリス女学院大学の文学研究科の非常勤講師となり、藤本研究室の院生と接点をもつことになった。そこで、特別聴講生の永井氏が年少者英語教育に絵本を効果的に使っている実践にふれることができた。また、「リテラシーとメディア・リテラシー」発表者である英文学者・英語教育者の服部氏とは、以前からメディア・リテラシーの言語教育への導入という点で志しを同じくしていた。今後はビューイングという教育領域の開拓を共に行っていく予定である。これによって、これまでの日本語教育と国語教育の連携に英語教育が加わることになる。

また、樋口万喜子氏(横浜国立大学留学生センター非常勤講師)は、年少者日本語教育への絵本の使用について関心をもっており、今後、絵本の使用というビューイング教育領域をコアとして、日本語教育、国語教育、英語教育の具体的・実質的連携の道を探る可能性が開かれている、と言える。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

①門倉正美、コミュニケーションをく見る>一言語教育におけるビューイングと視読解、早稲田日本語教育学、査読有、第8・9号、2011、115-120

②岡本能里子、国際理解教育におけることばの力の育成—大学における協働学習を通じた日本語教育からの提言、国際理解教育、査読有、第16号、2011、67-73

[学会発表](計8件)

①門倉正美、日本語で書くことに慣れるためのいくつかのタスク、韓国語学教員研修大会京畿道外国語教育研究院、2011.11.11.

②OKAMOTO Noriko, OKUIZUMI Kaori.: The creation of new values in Japanese texts through the use of multimodal communication, Visual Literacies, 2011.07.09, Mansfield College, Oxford University

③岡本能里子・石塚京子・上田安希子、4コマ漫画を題材とした留学生と日本語教員養成課程履修学生との間の協働の学びの可能性、日本語教育学会春季大会、2011.05.22、東京国際大学

④門倉正美、視読解—<見る>と<読む>の同期性と相互性、「リテラシーとメディア・リテラシー」シンポジウム、2010.11.13、東京国際大学早稲田キャンパス

⑤門倉正美、マルチモーダル・コミュニケーションへのメディア・リテラシー研究の貢献、社会言語科学会第25回大会(テーマ講演)、2010.03.14、慶應義塾大学日吉キャンパス

⑥岡本能里子、新聞のスポーツ報道におけるアイデンティティの構築、社会言語科学会第25回大会、2010.03.14、慶應義塾大学日吉キャンパス

⑦OKAMOTO Noriko, OKUIZUMI Kaori, KADOKURA Masami: Multimodal literacy in Japanese – Theory, practices, and application to Japanese language education, International Pragmatics Association Conference, 2009.07.14, Melbourne University

[図書] (計2件)

①門倉正美 (編著)、日本留学試験実戦問題集 読解、ジャパントイムズ、2011、147p.

②岡本能里子他8名、日本語能力試験スーパー模試 N1、N2、N3 アルク、2011、各 175p., 178p., 155p.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

門倉 正美 (KADOKURA MASAMI)  
横浜国立大学・留学生センター・教授  
研究者番号：80127753

### (2) 研究分担者

岡本 能里子 (OKAMOTO NORIKO)  
東京国際大学・国際関係学部・教授  
研究者番号：20275811

### (3) 連携研究者

奥泉 香 (OKUIZUMI KAORI)  
日本体育大学女子短期大学部・幼児教育保健科・教授  
研究者番号：70409829